

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平

天球丸発掘調査概要報告書

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平 天球丸発掘調査概要報告書

一九九二

1992

鳥取市教育委員会

## 序 文

この発掘調査報告書は、史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存修理事業として、天球丸石垣の修理に伴って実施した史跡鳥取城跡附太閤ヶ平「天球丸」の発掘調査記録です。

鳥取城跡は、市民の象徴であり、また、後世に継承していくべき貴重な歴史的財産です。鳥取市では、このような認識のもとに、関係各機関との協議を重ね、また、市民の深い理解をいただきながら保存整備に努めているところです。

さて、平成2年度と平成3年度にわたって実施しました鳥取城跡天球丸の調査も、関係各位のご協力によって無事所期の目的をはたし、報告書刊行のはこびとなりました。ささやかな冊子ではありますが、市民各位ならびに関係各位のご利用に供していただければ幸いです。

平成4年3月

鳥取市教育委員会

教育長 田中哲夫

## 例　　言

1. 本書は、平成2年度と平成3年度に国・県の補助金を得て鳥取市教育委員会が実施した鳥取城跡天球丸の発掘調査の記録である。
2. 本書に用いた方位は、遺跡分布図を除き磁北を示し、レベルは海拔標高である。
3. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
4. 報告書の執筆は前田　均・坪田晴子が行った。
5. 発掘調査の実施にあたっては、下記の関係者、関係機関の指導、助言ならびに協力をいただいた。記して謝意を表する。  
文化庁　奈良国立文化財研究所　鳥取県教育委員会文化課　鳥取県立博物館　鳥取県埋蔵文化財センター　鳥取市建設部開発課　上月工業　北垣總一郎　村上　勇　山根幸恵　山名　巖  
山中孤舟（順不同、敬称略）

## 本文目次

序文

例言

I	鳥取城の歴史	1
1.	鳥取城築城前史	1
2.	鳥取城築城	1
3.	近世以降の鳥取城	2
II	発掘調査の概要	4
1.	発掘調査の経過	4
2.	発掘調査の方法	4
3.	発掘調査の結果	9
III	まとめ	25

## 挿図目次

第1図	鳥取城跡、天神山城跡位置図	1
第2図	鳥取城破損御修復図(天和三年)	2
第3図	鳥取城跡天球丸位置図	3
第4図	第I遺構面遺構配置図	5・6
第5図	第II遺構面遺構配置図	7・8
第6図	調査区断面図	7・8
第7図	S K16実測図	11
第8図	S K17実測図	11
第9図	S K39実測図	11
第10図	S K48実測図	11
第11図	S D27実測図	13
第12図	石段遺構、石垣01実測図	15
第13図	遺構出土遺物実測図	18
第14図	遺構外出土遺物実測図(1)	19
第15図	遺構外出土遺物実測図(2)	19

第16図 古銭拓本	19
第17図 金属製品実測図	20
第18図 瓦 拓 本	21
第19図 鳥取御城絵図（延宝八年）	26

## 図 版 目 次

- 図版1 平成3年度調査区調査前全景（北東から）・天球丸石垣（西から）・A B C区第Ⅱ遺構面遺構検出状況（北東から）・D E F区第Ⅰ遺構面遺構検出状況（南東から）
- 図版2 D E F区第Ⅱ遺構面遺構検出状況（北東から）・D E F区第Ⅱ遺構面遺構検出状況（北西から）・石段検査状況（南西から）・石段検出状況（北西から）
- 図版3 石段取付状況（南西から）・石垣01検出状況（北から）  
石垣01取付状況（北西から）・石垣02検出状況（南西から）
- 図版4 A B区柱列跡検出状況（南東から）・D E区柱列跡検出状況（北東から）  
S K16検出状況（北東から）・S K17検出状況（南東から）
- 図版5 S K43検出状況（北西から）・S K42検出状況（北西から）  
S D27検出状況（北西から）・瓦窯検出状況（北西から）
- 図版6 遺構出土遺物
- 図版7 遺構外出土遺物
- 図版8 輸入陶磁器・金属製品

## 表 目 次

- 第1表 土坑状遺構一覧表 ..... 23・24
- 第2表 溝状遺構一覧表 ..... 24

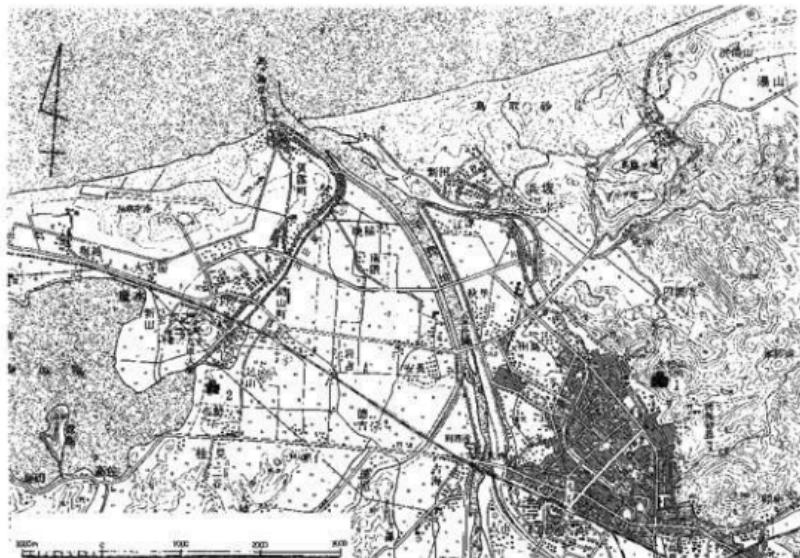
# I 烏取城の歴史

## 1 烏取城築城前史

南北朝時代の因幡・伯耆は、伯耆守護となった山名時氏が掌握していた。その拠点は、因幡国では二上山城に、伯耆国においては田内の城に置かれ、次第にその勢力を誇っていった。時氏は守護職を子供たちに引き継がせ、因幡の守護には三男の氏冬をあてた。『船場民談記』によれば、因幡の守護所が二上山城から布施天神山に移ったのは文正元年（1446）のことである。それ以来、天神山城は因幡の守護所として山名氏の活動拠点となつた。天神山城の東域には釣山城、北尾山城、吉山城、新山城等の城や砦が数多く構築され、軍事的な拠点をなしてゐた。このような中で、同族の但馬、伯耆・山名氏の対立抗争や、また、西城に勢力を持っていた尼子氏、毛利氏との争いが絶えず、30余年にも渡つて争乱の世が続いていた。

## 2 烏取城築城

烏取城は、鳥取平野東北部の標高263mの久松山に築かれた、中世の城の様相を呈する城である。天文9年（1540）、因幡守護山名誠通は、尼子氏との抗争に敗れ、その結果、尼子氏と同盟を結んだ。しかし、但馬山名氏の因幡侵入で誠通の国内支配は不安定となり、翌天文10年（1541）岩井



第1図 烏取城跡、天神山城跡位置図 (1. 烏取城跡 2. 天神山城跡)

表の合戦で両勢力が衝突した。天文17年（1548）には但馬山名氏が天神山城を奇襲し、この戦いの中で山名誠通は戦死した。このような争乱の中で、千代川右岸の久松山に砦としての城が築かれた。いわゆる鳥取城の誕生である。『稻場民談記』には「山ノ形嶮岨ニシテ八葉ノ谷尾ツソケ四方ケハシク切立タル事宛モ工汎ノケツリセルニ異ナラス—略—其高サ万仞ニシテ巡りハ三里ニ及ヘアタリニ双ノ山モナク—略—咫尺ニ千疊ノ地ヲシメ—國ノ山川唯限ノ下ニ明ナリ」との記述がみられ、久松山が戦略的拠点として良好な立地条件を備えた場所であったことが窺われる。鳥取城の誕生については、16世紀中頃（天文年間）に建てられたとされているが、築城年については諸説があり、築城主と共に今後の大きな課題となっている。

鳥取城の守備には因幡山名氏の家臣が交替あたり、後に家臣の武田高信が定番として城に入ったが、城を守る武田高信が布施天神山城に對して反旗をひるがえした。永祿6年（1563）、布施山名氏と兵を交えるまでに武田高信の鳥取城の勢力は大きくなり、結果布施山名氏の重臣中村伊豆守は討死、布施山名氏の勢力は失墜した。その後、毛利氏に敗れた尼子氏の遺臣山中鹿之助幸盛は、因幡守護山名農国と連合して武田高信を攻め落とし、鳥取城を奪取した。天正3年（1573）山名農国は、城を布施天神山から鳥取久松山に移し因幡の本城とした。城下町としての鳥取市の幕開けである。

### 3 近世以降の鳥取城

天正8年（1580）に始まった豊臣秀吉の鳥取城攻略は、時の城主吉川経家の切腹により幕を閉じた。この結果、鳥取城には秀吉の武将宮部継潤が入った。しかし、慶長5年（1600）関ヶ原の戦いにおいて豊臣方に味方したため、鳥取城主の宮部継潤は滅亡した。宮部継潤に代わって鳥取城に入ったのは、姫路城主池田輝政の弟の池田備中守長吉である。長吉は、狹隘な城地の修築を計画し、慶長7年（1602）から、山上ノ丸の本丸にある天守の改築や、山下ノ丸の二ノ丸、三ノ丸の構築、堀の拡張整備などを実施した。

その後、元和3年（1617）には、姫路城主池田光政が因幡、伯耆両国32万石の鳥取城主となり、こ



第2図 鳥取城破損御修復図（天和3年）  
「鳥取県立博物館所蔵」

これまで小大名によって分割統治されていた因・伯両藩は一つに統治され、鳥取藩が形成された。

寛永9年（1632）岡山藩主池田光仲は当時幼少であったが、鳥取藩との交換転封の命を受けて光政と入れ替わった。以後、鳥取城に入った光仲の子孫が、明治維新まで鳥取藩主としてその地位についた。鳥取藩最後の藩主池田慶徳は、版籍奉還により鳥取藩知事に任命された。

鳥取城は、明治12年（1879）建物が完全に撤去され、堀と石垣を残すのみとなった。以後、鳥取城跡地には公共施設や「仁風閣」などの建築物が建ち、昭和32年に史跡として指定を受け現在に至っている。

### 主要参考文献

「鳥取城の成立について」（『鳥取市史研究』第3号） 浜崎洋三著 1978年

「鳥取城」 山根幸恵著 1965年

「日本城郭大系」第14巻 鳥取・島根・山口 山根幸恵・藤岡大輔・三坂生治・白井翠臣編 1980年

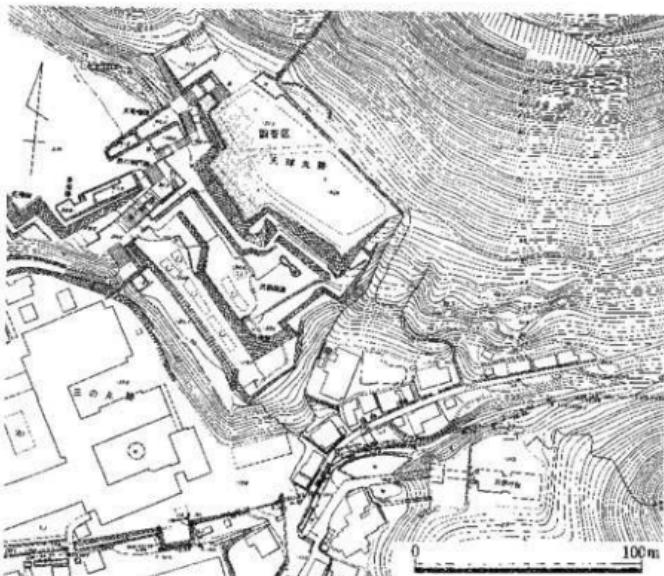
「久松山鳥取城—その歴史と遺構—」（『鳥取県の自然と歴史－6－』） 鳥取県立博物館 1984年

「因・伯の戦国城郭—通史編一」 高橋正弘著 1986年

「鳥取縣史」2 中世編 鳥取県 1973年

「新修鳥取市史」第一巻 古代・中世編 鳥取市 1983年

「稻場民謡記」 小泉友賛著



第3図 鳥取城跡天球丸位置図

## II 発掘調査の概要

### 1 発掘調査の経過

鳥取城は、標高263mの久松山山頂を本丸とし、山麓の南側裾部標高10m～51mに二ノ丸、三ノ丸などの城郭を構築していった中世山城の様相を呈する城である。現在では城郭に伴う建物ではなく、明治12年（1879年）に取り壊された以後は石垣と堀が残っているにすぎないが、石垣からは当時の偉容を偲ぶことができる。

明治以後放置されていた石垣は荒廃し旧状を失いつつあったが、それにも増して昭和18年に発生した鳥取大地震は、鳥取県の東部を中心に大きな被害をもたらし、城跡の石垣も各所で崩壊するなどの多大な影響を受けた。このような中で昭和32年に国の史跡に指定され、被害を受けた石垣の保存修理が始まった。修理は昭和34年から開始され、まず急を要する三階櫓石垣の保存修理から実施された。その後、山頂本丸、大菱櫓石垣、走櫓石垣などの修理が年次計画のもとに行われ、順次旧状の姿を取り戻しつつある。

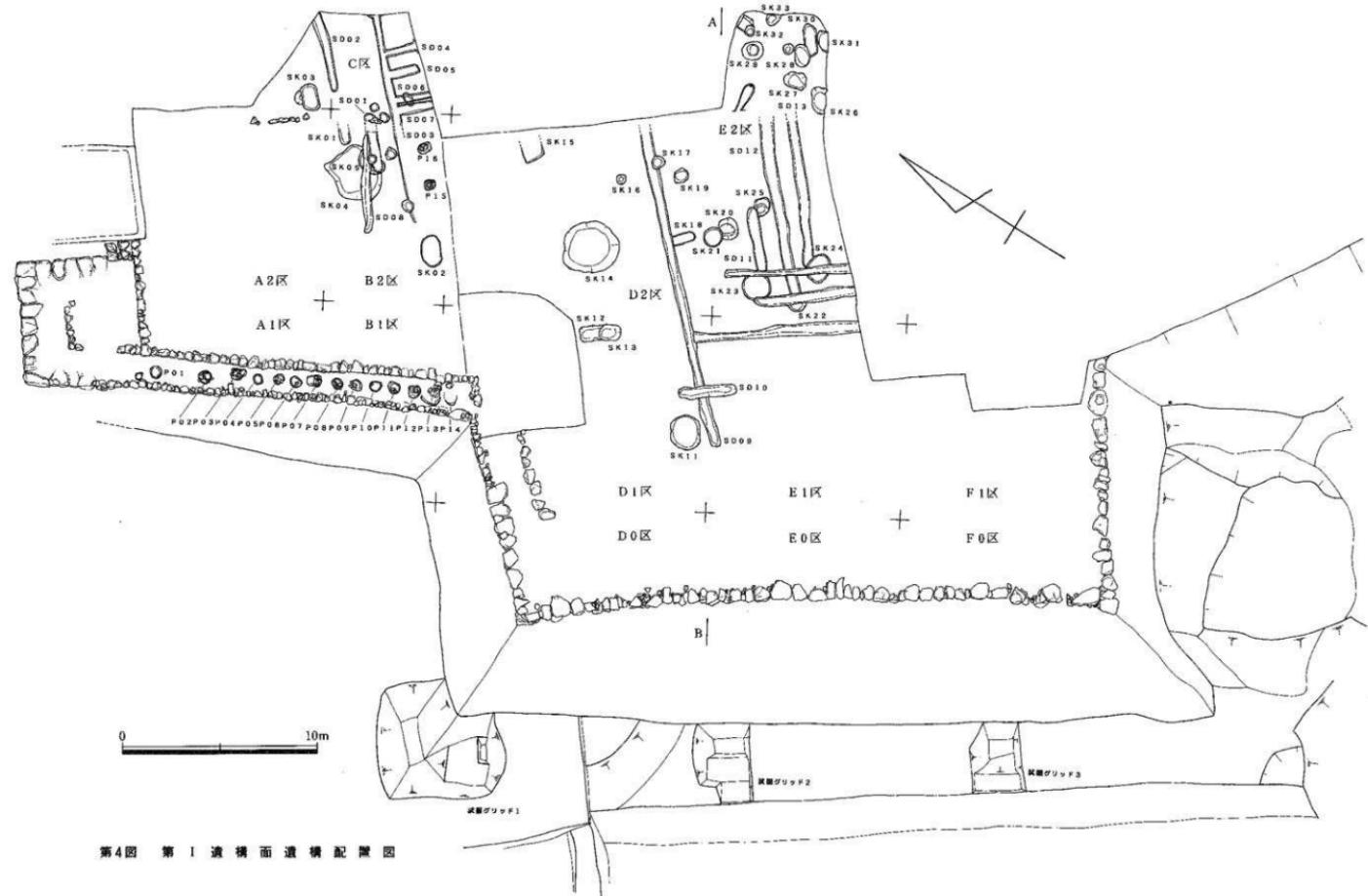
発掘調査は、天球丸石垣の保存修理に先立って行い、平成2年度と平成3年度に実施した。平成2年度は天球丸北西側の約320m<sup>2</sup>について、また、平成3年度は前年度調査区に隣接して約530m<sup>2</sup>を対象として発掘調査を行った。平成2年度の調査は5月から開始し、7月に現地調査を終了した。平成3年度は8月から現地での調査を始め、12月に現地調査を終了した。現地調査終了後引き続き出土遺物の水洗、注記作業や、記録類の整理作業を行い3月に調査を完了した。

### 2 発掘調査の方法

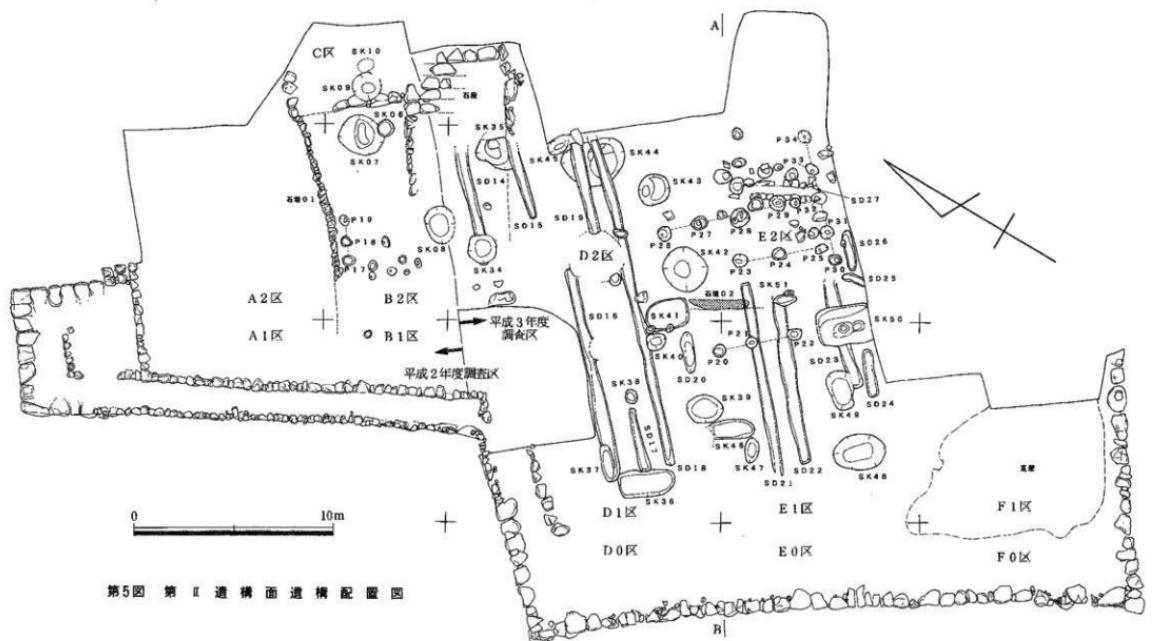
発掘調査は天球丸およびその周辺の現況調査から開始し、天球丸一帯の平面測量と、天球丸石垣の基底部確認調査を行った。その後、石垣解体修理作業に必要な範囲を発掘調査区域に設定し、表土の除去作業を開始した。表土除去後の掘り下げは基本的に人力によって行い、試掘トレンチによる土層観察を行いながら遺構面の検出を行った。遺構の検出は層単位で行い、検出した遺構は、写真、実測などの記録をとった。

遺構面の調査が終了した後に石垣の解体作業に入り、解体作業と並行して石垣の構造状況、および、石垣背面の栗石や盛土状況の調査を行った。また、調査区を立ち割る北東～南西方向の試掘トレンチを掘り下げ、盛土の状況や地表面の確認調査を実施した。

調査に先立ち調査区域の区割りを行い、調査基準となる小区画を設定した。調査区の北西側から北東側へ向かって順にA区、B区、D区、E区、F区とし、調査区北東側拡張区をC区とした。また、南西側から北東側へ向かって0区～2区に区画した。平成2年度調査区はA1区、A2区、B1区、B2区、C区となり、平成3年度はD0区～D2区、E0区～E2区、F0区～F1区である。遺構外遺物の取上げはこれらの区画単位で行った。



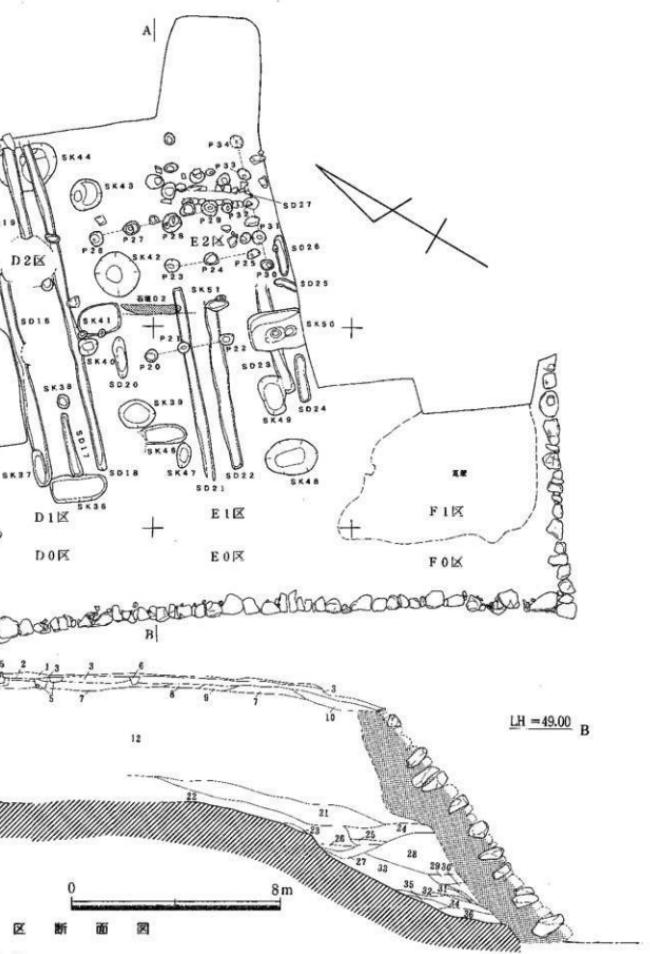
第4図 第1発掘面遺構配置図



第5図 第Ⅱ 遺構面遺構配置図

1. 土上
2. 黄褐色シート
3. 黄褐色土
4. 黄褐色シート(中空柱)
5. 黄褐色シート
6. 黄褐色シート
7. 黄褐色シート
8. 黄褐色シート
9. 黄褐色シート
10. 黄褐色シート
11. 黄褐色シート(黄褐色土ブロック、磚、瓦片を含む)
12. 黄褐色シート
13. 黄褐色粘土土(赤褐色土ブロックを含む)
14. 黄褐色粘土土(赤褐色土ブロック、瓦を含む)
15. 黄褐色粘土土(赤褐色土ブロックを含む)
16. 黄褐色粘土土(赤褐色土ブロックを含む)

17. 粘土質砂質土(赤褐色土ブロックを含む)
18. 黄褐色粘土土
19. 黄褐色粘土土(赤褐色土ブロックを含む)
20. 黄褐色粘土土(赤褐色土ブロックを含む)
21. 黄褐色粘土土(赤褐色土ブロックを含む)
22. 黄褐色粘土土(赤褐色土ブロックを含む)
23. 黄褐色粘土土(赤褐色土ブロックを含む)
24. 黄褐色粘土土(赤褐色土ブロックを含む)
25. 黄褐色粘土土
26. 黄褐色粘土土
27. 黄褐色粘土土



第6図 調査区断面図

### 3 発掘調査の結果

#### 調査区の層序（第6図）

調査前の天球丸は、公園整備に伴う花壇や柵などの施設や、それに伴う客土などによって旧状地  
形が失われており、また、石垣背面では石垣の沈下によるものみられる地形の変化が認められる。  
以下、調査区に設定した北東～南西トレントの土層断面からみた層序についてその概要を述べる。

表上は約30cm～50cmの厚さで認められ、表上下に均一の黄褐色砂質土層（第6図7層）が検出さ  
れた。この層の上面には土坑や溝などの遺構が認められ、この面を第I遺構面とした。第I遺構面  
の上層には18世紀以降から現代に至る遺物が混在しており後世の削平をうけているようである。

第I遺構面下約20cm～30cmで第II遺構面を検出した。第II遺構面上層の第7層には主に17世紀代  
とみられる陶磁器類が多く含まれている。

第2遺構面下の層序についてみると、正面石垣の背後約18mの地点で南北側に大きく傾斜する断  
層面が認められる。この断層面は地山面まで達しており、地山直上から断層面に沿って裏込めの塊  
石が検出された。塊石は高さ約2.4m、幅約2.4mが遺存している。塊石背面には地山の礫を含む砂  
質土や粘質土などの大量の盛土が行われており、この前面に石垣が構築されていたことがわかる。

天球丸正面の右垣の構築は、盛土と塊石の敷設を順次行って積み上げている。石垣の控えは90cm  
～220cmを測る。塊石背後の盛土についてみると石垣の中腹から下方は何層にも盛土が行われてお  
り、盛土と並行して石垣が築かれていた様子が窺われる。中腹から上方には均一の黄褐色砂質土  
が厚さ3m以上にわたって盛られている。

地山面は北東側から北西側に向かって徐々に傾斜を増しながら下っている。石垣の基底部は地山  
を整形した後に築いている。このことは、石垣裾部に設定した試掘グリッド1、2、3の調査で確  
認された。

#### 第I遺構面検出遺構（第4図）

現地表下30～50cmで検出した。基盤層は均一な黄褐色の砂質土である。遺構面は石垣背面近くで  
石垣側にわずかに傾斜するがおおむね平坦である。

第一遺構面からは土坑、溝、ピットなどの遺構を検出した。遺構はB2区、C区、D2区、F2  
区に集中しており、石垣の背面近くにはほとんどみられない。

#### 建物跡

ピット状遺構を25基検出した。A1区、A2区、B2区、E2区に集中している。

柱列P01～P14はA1～2区の正面石垣のすぐ背後に位置する。P01～P14間の長さ15.6mを測  
り、各ピットが直線的に並ぶ。ピットの間隔はP01～P02間で2.5m、P02～P14間ではほぼ1m  
当間隔である。規模は径45cm～65cm、深さ5cm～17cmを測る。P02、P03、P05～P13内には5cm  
～25cmの角礫が認められ、塀などの建物に伴う基礎部と考えられる。遺物は出土しなかった。

P15(53cm×64cm-27cm)、P16(49cm×77cm-29cm)はB2区で検出した。柱穴内には5cm～

25cmの深が3ないし5個置かれていて根石の様相を呈している。建物に伴う柱穴と考えられるが具体的な構造ははっきりしない。遺物は検出されなかった。

#### 上坑状遺構

28基（SK01～SK05、SK11～SK33）検出した。平面形は円形、梢円形、隅丸長方形を呈する。規模は、最小のSK16で長さ48cm、幅46cm、最大のSK04が長さ268cm、幅240cmを測るが、土坑の大半は長さ100cm～160cm、幅50cm～80cmである。深さは4cm～58cmで比較的浅い土坑が多く、断面形はおおむね逆台形を呈している。各上坑の性格についてははっきりしないが、SK16、SK17のように廃棄土坑的な性格が窺われる土坑もみられる。

SK16（第7図） D2区に位置する。円形の平面形を呈し、長さ46cm×48cm、深さ24cmを測る。断面形は逆台形である。土坑内および上面周辺には陶磁器、土師器、瓦などの破片が比較的まとまって出土しており、廃棄されたような様相を呈している。

SK17（第8図） D2区に位置する。円形の平面形をもつ長さ62cm×69cm、深さ24cmを測る土坑である。断面形は逆台形を呈する。土坑の底面には接する状態で完形の棧瓦が置かれている。地鎮祭的な性格の土坑の可能性も考えられる。

遺物は、SK03～05、12～18、20、21、25、29、33の埋土中から陶磁器、土師器、瓦、鉄製品、銅製品、古錢、貝殻等が検出された。陶磁器はSK03～05、12～18、20、21、25、29、33から出土した。陶磁器の大半は小片であるが、伊万里系の碗や皿、備前系摺鉢等がみられる。土師器はほとんどが皿の破片でSK04、16、18、20、21、33から出土した。瓦はいずれも破片でSK04、05、11、14～17から検出された。また鉄製品はSK03、04、16、29から出土したがいずれも腐食の著しい破片で形態不明である。銅製品はSK03、04、14から出土し、SK03、04から針がね状製品が、SK14からは煙管の吸い口が出土した。古錢はSK16から寛永通寶、SK33から景德元寶が検出された。貝殻はSK05の出土である。

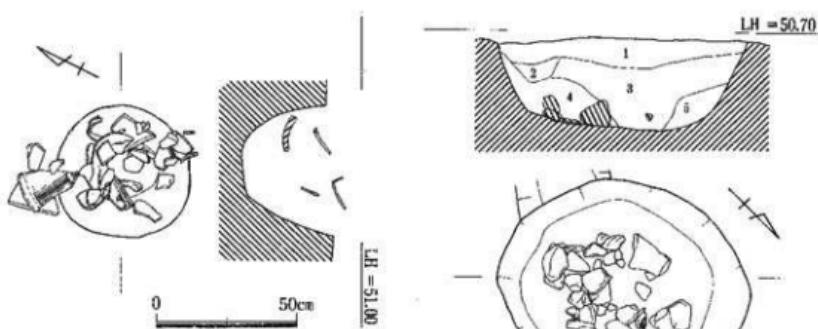
#### 溝状遺構

13基（SD01～SD13）検出した。A2区、C区、E2区に比較的まとまっている。溝の幅は36cm～65cm内におさまり、深さは4cm～25cmと全体に浅く、皿状あるいは逆台形に近い断面形を呈する。幅、深さ、断面ともに類似した形態を示している。主軸方向もN-44°～57°-Eか、あるいはこれらに直交する規則性が見られる。排水溝の可能性も考えられるが具体的な性格は特定し得ない。

遺物は、陶磁器片がSD02、03、04、06、09、10、11、12、13から、土師器片がSD03、12、13から、瓦片がSD09、11から出土した。いずれも溝埋土中からの出土である。

#### 第II遺構面検出遺構（第5図）

第I遺構面の12cm～30cm下層で検出した。基盤層は暗褐色砂質土（第6図11層）と黄褐色砂質土（第6図12層）である。遺構面は石垣の背面で若干傾斜するがおおむね平坦である。遺構面の上層には17世紀代に比定される陶磁器類が比較的多く含まれている。



第7図 SK 16 実測図

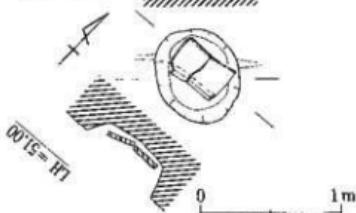
1. 暗灰色砂質土
2. 暗褐色砂質土
3. 褐色砂質土



1. 暗黄褐色砂質土
2. 暗褐色シルト
3. 褐色砂質土
4. 黄褐色砂質土
5. 暗褐色砂質土（黄褐色土ブロックを含む）

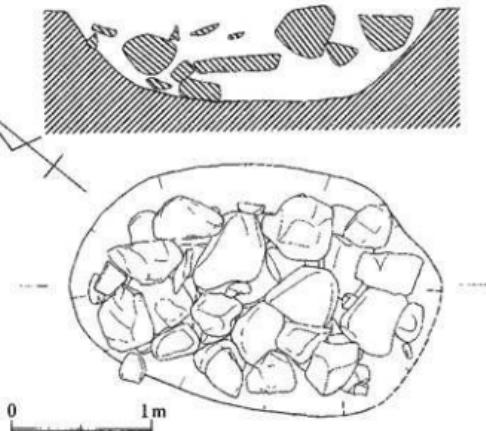
第9図 SK 39 実測図

0 1m



第8図 SK 17 実測図

LH = 50.90



第10図 SK 48 実測図

第Ⅱ遺構面で検出した遺構には土坑、溝、ピット、瓦窪、石段、石垣がある。遺構はB 2区、C区、D 1区～F 1区、D 2区～F 2区に比較的まとまっており、石垣の背面近くでは明確な遺構はほとんど認められなかった。

#### 建物跡

P 17～P 19の柱列跡はB 2区から検出した。柱穴は、径45cm～60cm、深さ13cm～20cmを測り、ほぼ1m当間隔で並んでいる。P 17とP 18の底面中央には幅16cm～25cm、厚さ10cm前後の石が置かれしており柱の礎石の様相を呈している。すぐ北西側には石垣01が並走しており、この石垣後背に構築された柵あるいは塀に伴う柱穴の可能性が考えられる。

E 1区、E 2区からP 20～P 22、P 23～25、P 26～P 29、P 30～P 34の掘立柱柱列跡を検出した。P 20～P 22、P 23～25、P 26～P 29の主軸はほぼ同方向を向き、柱穴の間隔は2m前後を測る。P 20～P 22、P 23～25、P 26～P 29間の長さは順に4m、4.1m、6.1mである。ピットの規模はP 20～P 22が径60cm～70cm、深さ27cm～28cm、P 23～25が径60cm～70cm、深さ14cm～20cm、P 26～29は径68cm～90cm、深さ38cm～55cmを測る。またP 30～P 34は全長6.4mを測り、各柱穴間は約1.5m当間隔で直線的に並ぶ。各柱穴の規模は径55cm～70cm、深さ43cm～52cmである。主軸はP 20～P 22、P 26～30、P 26～P 29の柱列に対しておおむね直交している。これらの柱列は建物に伴うものと考えられるが、断片的であり建物規模、構造等の詳細ははっきりしない。

遺物はP 17から陶磁器片、P 21から瓦片、P 23、24、26、34から土師器片が出土した。

#### 土坑状遺構

24基（S K05～S K10、S K34～S K51）検出した。平面形は円形、梢円形、隅丸長方形を呈する。規模は、長さ70cm～309cm、幅46cm～223cmを測り、長さ2m以上を測る比較的大型の土坑が多くみられる。深さは8cm～117cmで、50cm以内の浅い土坑が主である。断面形は逆台形を呈する。これらの土坑の中には坑内に多量の石が埋められているS K42、S K48や、瓦が埋められているS K43など廃棄的な様相を呈する土坑や、底面に石組施設をもつS K39などがあるが、性格不明の土坑が大半である。S K43は第Ⅱ遺構面の検出であるが、出土遺物などからみると第Ⅰ遺構面期の遺構と思われる。

S K39（第9図） D 1区に位置する。平面形は梢円形を呈し、長さ175cm、幅140cm、深さ50cmを測る。断面形は逆台形である。土坑底は平坦に整えられていて、この底面中央部には径5cm～25cmの角砾や円砾が多数置かれている。礎石に伴う根石の可能性も考えられる。

S K43 D 2区で検出した。円形の平面形をもつ長さ150cm×154cm、深さは30cmを測る土坑である。断面形は皿状を呈し、底面にわずかな凹凸が見られる。土坑内全体に多量の瓦が埋まっていた。瓦は大半が平瓦と丸瓦で占められ、いずれも破片状態の出土である。廃棄された様相が窺われる。これらの瓦とともに陶磁器片、鐵製の釘が検出された。

S K48（第10図） E 1区に位置している。梢円形の平面形を呈し、長さ265cm、幅175cm、深さ

61cmを測る。断面形は逆台形で底面は平坦である。坑内全体に最大60cm前後の円礫や角礫が多数埋められている。礫の出土状態に規則性は見られず廃棄された様相を呈している。

遺物はS K38、41、45~48を除く各土坑から出土しており、陶磁器、土師器、瓦、鉄製品、銅製品、古錢等がある。

陶磁器はS K06~10、S K34、35、37、39、40、42、44、49、50から出土した。大半が小片であるが、17世紀代とみられる唐津系や伊万里系の皿、碗、鉢や備前系の擂鉢などが出土した。またS K50には16世紀後半に比定される中国製の磁器片が含まれている。土師器はいずれも皿でS K36、39から出土した。瓦はS K07、39、43、44、49から検出された。平瓦、丸瓦の破片が主であるが、S K39、50から軒丸瓦片が出土している。鉄製品はS K07、34、39、43、44、49から出土した。腐食の著しい形態不明のものがほとんどであるが、S K43、44からは釘が検出された。銅製品はS K06、07から針がね状の製品が、S K35からは煙管の雁首が出土した。古錢はS K07から永樂通寶が1点検出された。

#### 溝状遺構

14基(S D14~S D27)検出した。溝はD 2区とF 2区に集中している。主軸はS D25、27を除きN-42°~53°-Eにとりほぼ同一方向を向く。正面の石垣に対してはおむね直交している。幅は35cm~70cmを測るが、60cm前後の幅を有する溝が大半をしめる。溝の深さは全体に浅く6cm~18cmを測り、断面は皿状ないし逆台形に近い形態を呈する。規模や形態、また主軸方向などがよく類似しており、同様の性格をもつものと推測される。排水に伴う溝の可能性が考えられる。

S D27(第12図) E 2区で検出した。他の溝と形態が異り、30cm~55cmの角礫を並べて構築した石組の溝である。規模は遠存長4m、幅33cm~40cm、深さ16cmを測る。溝内には上から順に暗褐色粘質土、暗黄褐色砂質土、黄褐色砂質土が堆積している。最下層の黄褐色砂質土は平坦に整えられ非常によくしまっており、この層の上面が床面とみられる。排水溝として機能していたものと考



第11図 S D 27 実測図

えられる。

遺物は、陶磁器の細片がS D17、19、21、22から、土師器皿片と瓦片がS D19、21で、不明鉄製品がS D19から出土した。いずれも埋土中からの出土である。

#### 瓦窯遺構

F 1区から検出した。長さ約10m、幅6m前後の範囲にみられ、厚さ最大35cmにわたって大量の瓦が廃棄されている。瓦は丸瓦と平瓦の破片が主であるが、揚羽蝶文や巴文などの軒丸瓦129点、軒平瓦59点が出土した。これらの瓦の中には焼痕のみられるものがわずかに含まれている。そのほかの遺物として備前系の摺鉢や土師質の塩壺が検出された。

#### 石段遺構（第12図）

C区に位置し、現存する石垣の約11.5m背後で検出した。石段と、石段が取り付く石垣の一部はすでに抜取りされていて原状を失っている。遺存しているのは石段の上段の一部と、石垣の下半部である。これらの遺存部の上面には黄褐色砂質土や暗褐色砂質土が大量に盛られており曲輪の改變が行われたことが窺われる。

石段はN-45°-Eに主軸をとり、南西側から北東側へ上がる。長さは約7.1m、間口4.3m、基底部から最上段までの高さ4.4mを測る。各段の奥行きは50cm~60cm、高さは35cm前後である。段数は遺存部から推定して10~11段と考えられる。

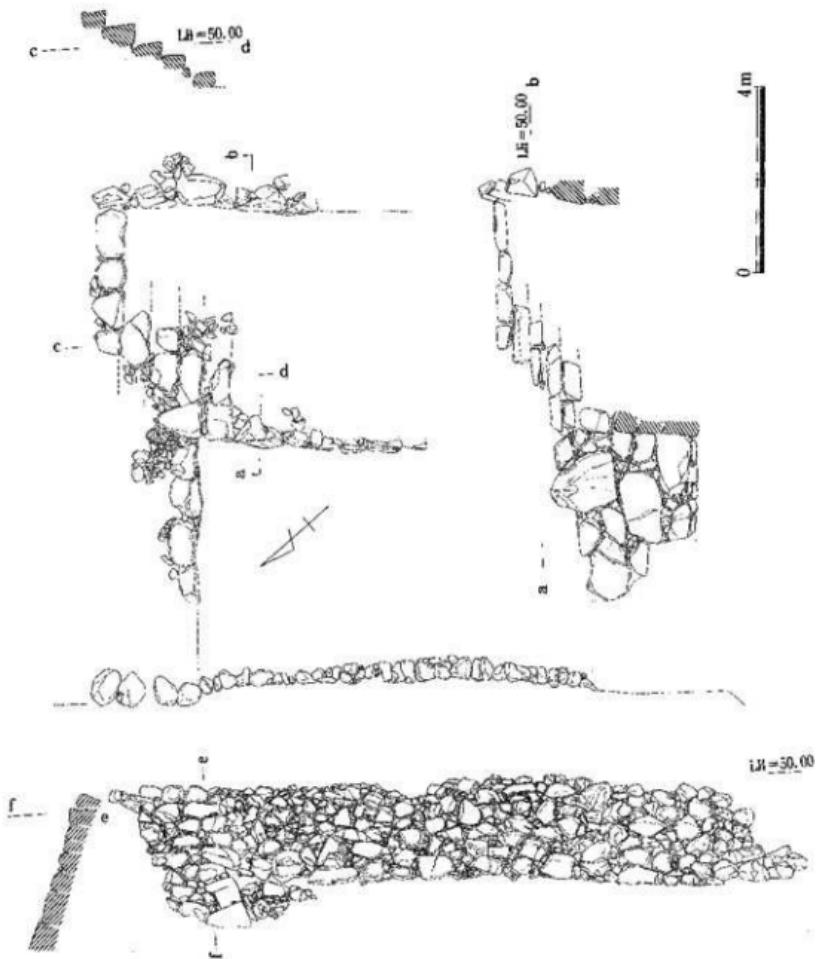
石段の取付けは、南東~北西に主軸をとる石垣と、これに直交する北東~南西に延びる石垣の基部に行われている。南東~北西方向の石垣は、石段の西側側面石垣から北西へ約5.5m地点で隅となり、その後約90°の角度を振って北東へ延びる。この石垣と、これに直交する北東~南西に延びる一連の石垣によって曲輪が形成されていたものと思われる。

石垣の構築は地山を掘削して行っている。地山の切りおとしは石段の北西側で顕著にみられ、急角度で大きく行われている。掘削面の高さは最大4m前後を測る。基底部は平坦に整えられている。石垣は地山掘削面から約2m前面から築かれ、75°前後の急勾配で積み上げられている。石材には主に花崗岩を用い、長さ1mをこえる大型の石を比較的多く使用している。

遺物は石段南側の裏薺石の中から16世紀後半に比定される中国製の磁器片が出土した。石段の築造時期については特定し難いが、天球丸における初段階の施設と思われる。

#### 石垣01（第12図）

石段の西側約5.5mに位置し、南東~北西に延びる石垣の北西隅から南西方向に継ぎ足された石垣である。石垣上部の一部はすでに抜き取られていて原状は失われている。主軸はN-47°-Eに向き湾曲ぎみに延びる。規模は遺存長11.5m、検山高3mを測る。石垣を構成する石材は長さ1mをこえるものではなく全体に小型である。石垣の勾配は70°前後で比較的急である。石垣背面には裏込めの薺石が認められる。裏込めの背後には黄褐色砂質土、暗褐色砂質土が大量に盛られており、石段遺構が廃絶した後この石垣が構築され、曲輪の拡張が行われたものと思われる。



第12図 石段遺構・石垣01実測図

遺物は石垣前面の埋土中から17世紀代に比定される伊万里系の皿（第14図20）や、唐津系の皿（第14図18）、鉢（第14図24）が出土した。これらの遺物から石垣の廃絶は17世紀代と考えられる。石垣02

D 2区～E 2区に位置する。第Ⅱ遺構面下約2.7mで検出した裏栗石と、土層の断面観察によつてその存在を確認した。石垣の本体はすでに抜取りされている。石垣の全容は把握できなかつたが、

裏栗石は幅約2m、高さ2.4mにわたって遺存しており南東から北西に延びている。主軸はN-35°Wにとり、現存する天球丸正面石垣の主軸より若干北にむいている。石垣の天端は断面観察からみて正面石垣から約18m背後に位置していたものと推定される。

この石垣基底部の標高は46.6mを測り、この標高は石段遺構の基底部の標高46.7mと一致している。また石垣を北西側に延長すると、石段の南側石垣の延長線と直交する関係がみられる。これらのことから推定して、石段を作った石垣とこの石垣によって曲輪を構成していた可能性が想定される。

#### 出土遺物

##### 遺構出土遺物

遺物には陶磁器、土師器、瓦、金属製品、古銭がある。遺存状態は全体に悪い。陶磁器は大半が細片であるが、唐津系の皿、碗、鉢や、備前の摺鉢などがみられる。土師器は、瓦窯から塗壺が出土しているが、他は皿である。瓦はSK43および瓦窯から大量に出土した。丸瓦と平瓦が主体であるが、軒丸瓦や軒平瓦が含まれている。瓦については後に一括して述べることにする。金属製品には煙管、鉄釘がある。腐食がかなり進んでいて形態不明のものが大半である。古銭は「寛永通寶」、「景德元寶」が出土した。國化はこれらの遺物の中から遺存状態が比較的良好で特徴的なものについて行った。第13図1・6～8はSK10、2～4・14はSK16、5はSK08、9はSK07、10はSK06、13はSK04、11・12は瓦窯から出土した。また、第17図7・11はSK06、10はSK14から、第16図1はSK16、2はSK33、3はSK07から出土した。

##### 陶磁器（第13図1～14）

皿1～3　1は底部のみ残存する。底面に糸切り痕が見られる。内外面底部に4ヵ所の砂目跡が残る。施釉部分は灰褐色を呈する。17世紀。2は2/3が残存する。灯明皿とみられ、内面にU字型の切り込みが3ヵ所認められる。茶褐色を呈する。3は1/3が残存する。高台端面に輪状の砂目跡が残る。高台端面を除く全面に施釉。内面底部は2.2cm幅を蛇ノ目状に釉を割ぐ。内面は2条の沈線を廻らし、あやめの花文と扇子文を一部濃筆で染付ける。外面にも染付けが見られる。19世紀前半と思われる。

碗4～8　形態には腰部が外へ張出し口縁部が外反するもの5・6と、口縁部が単純に上方へ立ち上がるものの4・7がある。4は1/6が残存する。内面から高台脇まで釉を施し淡緑色を呈する。貫入がみられる。5は1/7が残存する。内外面高台脇まで施釉。淡乳黄色を呈する。6は1/3が残存する。高台部を除く全面に施釉。淡乳黄色を呈する。外面中位に2条の沈線が廻る。17世紀。7は2/3が残存する。蛇ノ目状の高台を持つ。高台を除く全面に施釉。淡黄褐色を呈する。17世紀。8は口縁部欠失。底部完存。赤褐色の胎土に乳白色の釉をかけ、その上から透明釉を施している。高台端面を除き全面に釉を施す。唐津系。17世紀。

鉢9　底部のみ完存する。内外面高台脇まで施釉。淡黄緑色を呈する。内面底部の4ヵ所に日跡が残る。胎土は2mm前後の砂粒を多く含む。唐津。

盃10 ほぼ完存する。高台を除く全面に施釉。淡乳灰色を呈する。胎土は1mm~2mmの砂粒を多く含む。

鉢12~14 12は口縁部1/16が残存する。復元口径26.4cm。口縁部は外面に2条の凹線、内面に段を持ち、端部は丸味を持たせて上方へつまみ上げる。内面は1.6cm幅に5条の櫛描条線が認められる。13は1/4が残存する。復元口径35.8cm。口縁部は外面に2条の凹線、内面に1条の凹線と段を持ち、端部は丸味を持つ。内面は8条単位の櫛描条線を重複させて施す。14は1/8が残存する。復元口径40.6cm。口縁部は外面に2条の凹線、内面に1条の凹線と段を持ち、端部は平坦である。内面は10条単位の櫛描条線を重複させて施し、底部にも5条の櫛描条線が見られる。いずれも備前系。

壺壺11 2/3が残存する。器高10.5cm、口径6.7cm、胴部径7.4cmを測る。明瞭な頸部は認められず筒型をなす。口縁部内外面ヨコナデ。全体を指成形後指ナデ。内面に絞り目。内外面に指頭圧痕が見られる。外面は橙色、内面赤橙色を呈する。胎土は5~6mmの砂粒を多く含む。胴部に刻印が認められるが一部欠失のため解読不可。

#### 金属製品（第17図7・10・11）

煙管 7は雁首、10・11は吸い口である。いずれも表面の腐食がかなり進んでいる。7は完存する。長さ4.3cm、火皿口径1.45cm、火皿底部孔径は0.9cmである。接合された部分が分離する。10は吸い口側の先端を欠失する。残存長4.9cm、最大径1.15cm、最小径0.4cmである。羅字の取付け部は0.55cm幅が他より若干厚くなっている。11は完存する。長さ4.35cm、羅字の取付け部分の口径1.05cm、吸い口部分の口径0.5cmである。接合部がわずかに分離する。いずれも真鍮製である。

#### 古銭（第16図1~3）

法量的に差はなく、径は2.4cm前後と均一である。1・2は完存する。1は「寛永通寶」、2は「景徳元寶」で出土した古銭の中で一番古いものである。3は1/2が欠失するが「水」「寶」の文字が読み取れる。

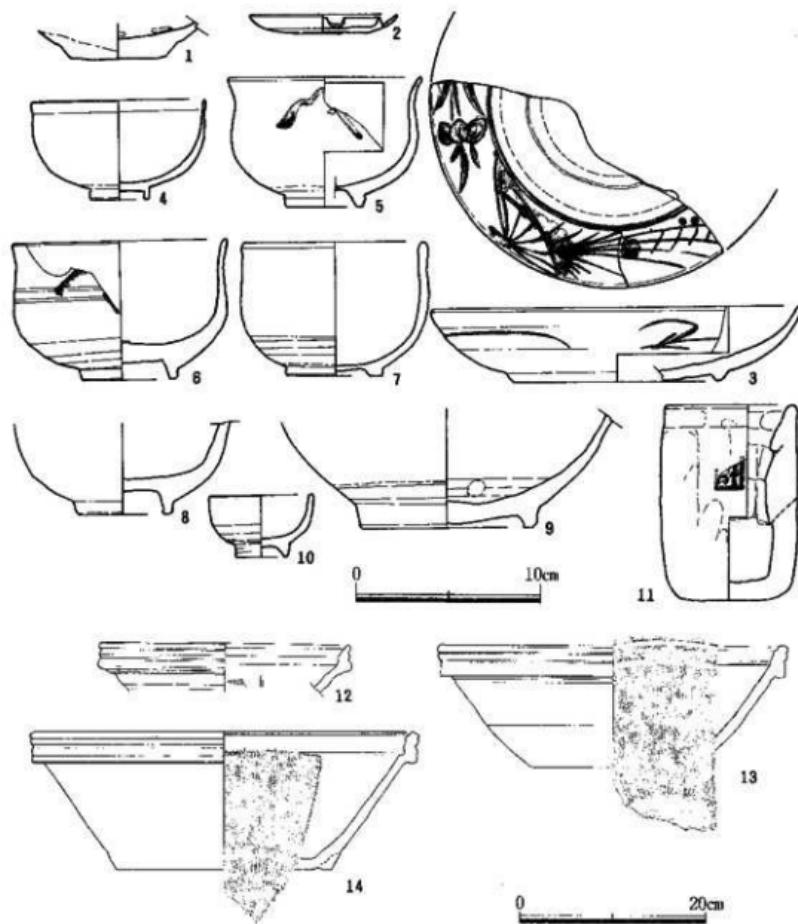
#### 遺構外出土遺物

陶磁器（皿、碗、鉢）、土師器（皿）、瓦類、金属製品（釘、鋸、煙管、簪）、古銭、硯等が出土した。これらの遺物のなかで、良好な遺存状態を示すものについて図化した。

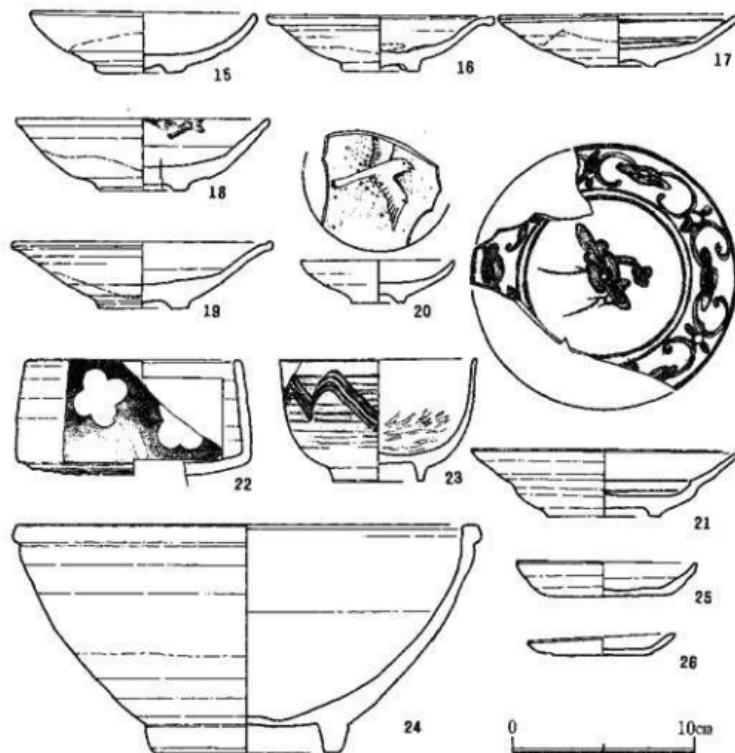
#### 陶磁器（第14図15~24）

皿15~21 大別して2種類の形態がある。口縁部が外反する16・19と、外反しない15・17・18・20・21である。高台はいずれも削り出し高台である。15は2/3が残存する。外面上半と内面に縦釉を施す。胎土は1~3mmの砂粒を多く含み、5mm大の砂礫を若干含む。唐津。16は1/3が残存する。内面底部3ヵ所と高台内2ヵ所に目跡が残る。内外面高台脇まで釉を施し淡青灰色を呈する。17は2/3が残存する。高台の2ヵ所に砂目跡、端面にわずかに糸切り痕が残る。内面は鉄釉で3条の圈線を施した後、外面上半と内面に施釉。施釉部分は淡緑色を呈する。胎土は1~2mmの砂粒を若干含む。唐津。18は1/4が残存する。高台端面は平坦である。内面中央に稜を持つ。内面から外面上

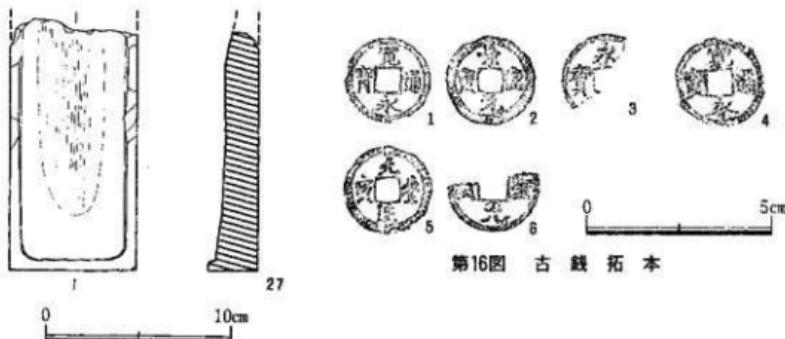
半まで施釉、淡緑灰色を呈する。胎土は1~2mmの砂粒を多く含む。19は2/3が残存する。高台外面の3ヶ所に砂目跡、端面に糸切り痕が残る。釉を内面から高台脇まで施し、淡緑灰色を呈する。外面施釉部に乳黄色の釉をまだらに施し模様化している。20は染付皿。1/3が残存する。高台端面に輪状の砂目跡が残る。全面に施釉。内面は一羽の小鳥を染付けた後全体を淡藍色で吹墨している。伊万里。21は1/2が残存する。染付皿である。内面に3条の圈線を廻らし、草花文を濃筆で描く。高台内に砂目跡が残る。全面に透明性の強い釉を施す。



第13図 遺構出土遺物実測図



第14図 遺構外出土遺物実測図(1)



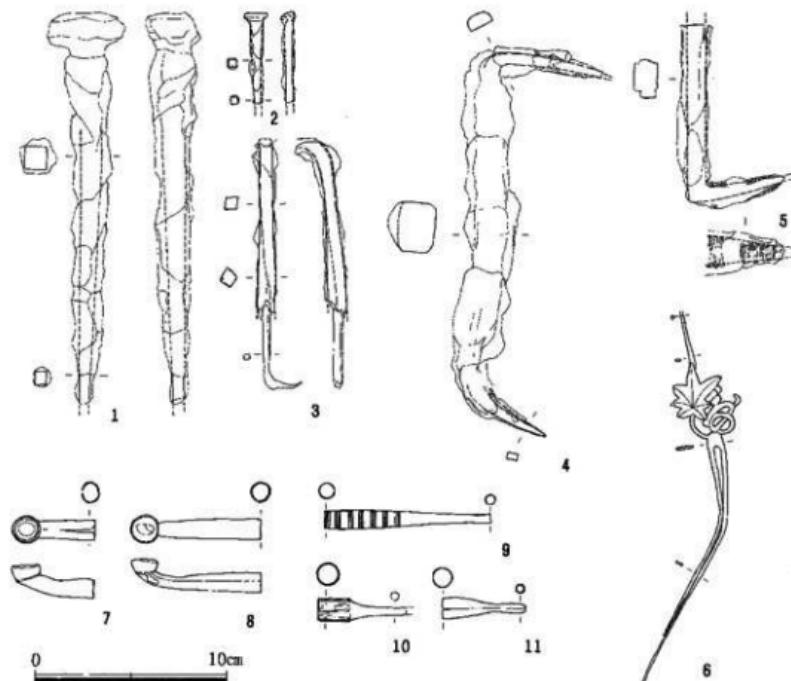
第15図 遺構外出土遺物実測図(2)

碗22・23 22は高台部欠失。1/4が残存する。体部は腹部が大きく張り出し内傾気味に直線的に立ち上がる。外面に花弁文様を施す。内面から体部に黒釉、文様部分には透明釉を施す。胎土は精緻な淡灰色で、2~3mmの砂粒を多く含む。23は1/2が残存する。高台端面に輪状の砂目跡が残る。体部外面は乳白色の釉を周回させ、その後櫛状工具で波状文を施す。内面も同種の釉を用いる。仕上げは高台端面を除く全面に透明釉を施す。胎土は精緻な暗紫褐色である。

鉢24 1/3が残存する。口縁部は外側に肥厚し、端部は平坦である。内面下半と外面中位には乳色の釉を周回させて施し、他は暗茶灰色を呈する。高台は無釉。胎土は赤褐色で1~3mmの砂粒を含む。唐津。

土師器（第14図25・26）

皿25・26 25は2/3が残存する。底面に糸切り痕が見られる。口縁外面に煤が付着する。26は完形である。口縁端部に煤が付着する。共に内外面ヨコナデ後ナデ調整である。



第17図 金属製品実測図

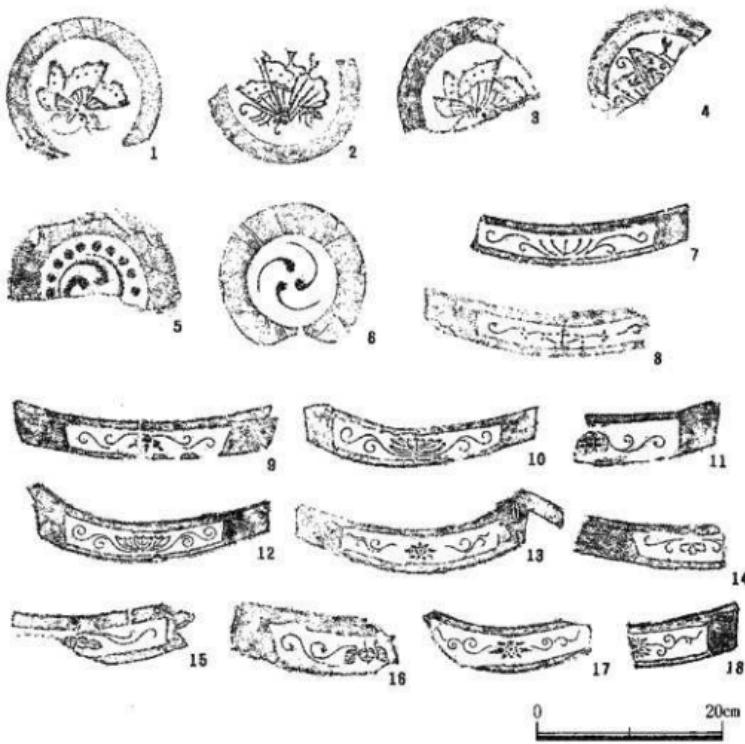
金属製品 (第17図1~6・8・9)

鉄釘1・2 共に腐食が激しく尖端部が欠失する。1は大型で残存長20.4cm、断面は方形をなし幅1.1cmを測る。2は残存長4.75cm、断面は方形で幅0.45cmを測る。1の尖端部に木質が残る。

鉄鎌3~5 3は残存長13cm。かなり腐食が進む。4は大型で残存長28cm。5は残存長14cm。いずれも断面は方形で尖端に木質が残る。

簪6 平打簪。残存長19.2cm。耳搔部を欠き、足はわずかに左へ湾曲するが、遺存状態は比較的良好である。鏡部分は紅葉と文字で飾られる。字体は抽象的で特定し難いが「寿」「夏」「度」等の可能性がある。真鍮製か？

煙管8・9 8は雁首、9は吸い口である。8は火皿口径1.4cm。火皿底部は破損する。9はほぼ完存する。現存長8.75cm、羅字の取付け部分の口径0.95cm、吸い口部分の口径0.45cmである。羅



第18図 瓦 拓 本

字側胸部には0.25cm幅に6条の平行沈線を7ヶ所に廻らし装飾する。いずれも真鍮製である。

#### 古 錢（第16図4～6）

4・5は完存する。4は「寛永通寶」、5は「元豊通寶」である。6は1/2が欠失するが、「聖」「元」の文字が読み取れる。

#### 石製品（第15図）

硯27 海部が欠失する。残存長13.5cm、幅6.75cmである。陸部は使用が著しく凹面をなす。

#### 瓦（第18図1～18）

主に瓦溜とSK43から出土した。大半は破片で丸瓦、平瓦で占められるが、軒丸瓦、軒平瓦も比較的多く含まれている。軒丸瓦には揚羽蝶文と巴文がある。軒平瓦は瓦当面の文様の違いから12種類が見られる。このほかに鬼瓦の一部と思われる破片が出土している。

軒丸瓦1～6 1～4・6は瓦溜から、5はSK04から出土した。外縁は全て同型で直立素文縁をなす。

揚羽蝶文1～4 蝶の顔の向きから4種類に分け、1は右正面、2は左正面、3は右向きである。4は瓦当半分を欠失するが、羽の向きから顔は左向きと思われる。瓦当直径は1・2が16.4cmで、3・4は共に1/2欠失している。復元径は、3は17cm前後、4は15cm前後である。羽の形は1と3が同類、2と4が同類である。羽の文様は斑点を珠文で表す。

巴文5・6 左巻きの三ツ巴。5は胸部が残存している。大型の瓦で全長34cm。瓦当部下半を欠くが直径18cm。下縁が残存する。外区に珠文を配する。巴の尾部は長い。外縁がやや内傾する。凹面は布目痕が残る。外縁端から21.5cmのところに直径1.2cmの釘孔を凸面から穿つ。6は瓦当直径15.8cm。外縁幅が広く瓦当面は狭い。珠文を伴わない。巴の尾部は太く短く次の巴と離れている。

軒平瓦7～18 7～11、14～16は瓦溜から、12・13・17・18は遺構外から出土。瓦当面に見られる唐草文は左右に2葉ずつ展開する形の均整唐草文である。13・17・18の様に葉手の先端に子葉の付くものもある。中心飾りは各々異なるが、7は棒状の葉を表現し、9・11・15・16は木の葉文を表している。8・10・12～14・17・18は花文と思われる。10・12は酷似しているが、左右の葉脈に違いが見られる。13・17・18は同類とみられ、中の珠文は同一であるが、それを囲む華弁の枚数がそれぞれ異なる。13・18には側縁に刻印がみられ、13は「作」、14は二文字が確認されるが陰影が薄く判然としない。

第1表 土坑状遺構一覧表

遺構名	法量 [m]			平面形	断面形	主軸方向	出土遺物
	長さ	幅	深さ				
SK-01	(76)	58	16	梢円形	逆台形	N-44°-E	
SK-02	158	100	7	梢円形	逆台形	N-46°-E	
SK-03	124	82	17.5	隅丸長方形	逆台形	N-49°-E	
SK-04	268	240	17	不整円形	逆台形	—	
SK-05	(143)	(80)	18	梢円形	逆台形	N-22°-E	陶磁器・鉄製品
SK-06	79	70	27	円形	逆台形	—	陶磁器(碗、皿)・土師器・瓦・銅製品
SK-07	225	190	50	梢円形	皿状	N-29°-W	陶磁器(盆)・銅製品
SK-08	190	141	20	梢円形	皿状	N-57°-E	陶磁器(鉢)・銅製品
SK-09	140	136	10	円形	皿状	—	陶磁器
SK-10	85	—	80	—	—	—	陶磁器(碗、皿)
SK-11	174	144	30	梢円形	逆台形	N-59°-E	瓦
SK-12	117	80	58	隅丸長方形	逆台形	N-40°-W	陶磁器
SK-13	(117)	73	46	隅丸長方形	逆台形	N-40°-W	陶磁器(碗)
SK-14	278	261	48	円形	逆台形	—	陶磁器・瓦・煙管
SK-15	(117)	106	14	—	皿状	—	陶磁器・瓦
SK-16	48	46	24	円形	逆台形	—	陶磁器・土師器・瓦・古錢
SK-17	69	62	24	円形	逆台形	—	陶磁器・瓦
SK-18	(126)	54	4	隅丸長方形	皿状	N-47°-W	陶磁器(碗)・土師器
SK-19	77	72	15	円形	逆台形	—	
SK-20	110	103	53	円形	逆台形	—	陶磁器・土師器
SK-21	101	95	8	円形	皿状	—	陶磁器・土師器(皿)
SK-22	170	—	22	円形	皿状	—	
SK-23	137	—	9	円形	皿状	—	
SK-24	140	100	6	梢円形	皿状	N-85°-W	
SK-25	108	90	20	梢円形	逆台形	N-68°-E	陶磁器
SK-26	121	—	31	—	逆台形	—	
SK-27	110	78	29	梢円形	逆台形	N-19°-W	
SK-28	116	72	14	梢円形	皿状	N-42°-E	
SK-29	104	87	45	梢円形	逆台形	N-34°-W	陶磁器・鉄製品
SK-30	160	61	11	隅丸長方形	皿状	N-49°-E	
SK-31	(100)	—	8	—	—	—	
SK-32	68	—	15	—	皿状	—	
SK-33	67	—	46	—	逆台形	—	陶磁器・土師器・古錢
SK-34	149	142	23	円形	皿状	—	陶磁器・鉄製品
SK-35	(230)	(155)	52	—	U字形	—	陶磁器・煙管
SK-36	275	133	11	隅丸長方形	皿状	N-39°-W	上師器
SK-37	180	65	25	長梢円形	逆台形	N-50°-E	陶磁器
SK-38	70	66	8	円形	皿状	—	
SK-39	175	140	55	梢円形	逆台形	N-43°-W	陶磁器・上師器・瓦・鉄製品
SK-40	96	86	38	不整円形	逆台形	N-30°-W	陶磁器
SK-41	210	150	9	隅丸長方形	皿状	N-42°-W	
SK-42	226	208	97	円形	逆台形	—	陶磁器

遺構名	法量 (m)			平面形	断面形	主軸方向	出土 遺物
	長さ	幅	深さ				
SK-43	154	150	30	円形	皿状	-	陶磁器・瓦・鉄製品(釘)
SK-44	309	223	66	椭円形	逆台形	N-52°-E	陶磁器・瓦・鉄製品(釘)
SK-45	(102)	-	19	-	-	-	
SK-46	225	88	17	隅丸長方形	逆台形	N-33°-W	
SK-47	130	71	14	椭円形	逆台形	N-60°-E	
SK-48	265	175	61	椭円形	逆台形	N-42°-W	
SK-49	190	120	74	隅丸長方形	逆台形	N-49°-W	陶磁器・瓦・鉄製品
SK-50	(264)	186	117	隅丸長方形	逆台形	N-39°-W	陶磁器・瓦
SK-51	120	46	47	椭円形	逆台形	N-38°-W	銅製品

( ) 値は遺存長・検出長

第2表 溝状遺構一覧表

遺構名	法量 (m)			断面形	主軸方向	出土 遺物
	長さ	幅	深さ			
SD-01	304	58	11	逆台形	N-49°-E	
SD-02	(420)	50	7	逆台形	N-44°-E	陶磁器
SD-03	(1,070)	49	7	逆台形	N-47°-E	陶磁器・土師器
SD-04	(196)	40	6	逆台形	N-48°-W	陶磁器
SD-05	(194)	48	4	逆台形	N-47°-W	
SD-06	(190)	36	5	逆台形	N-42°-W	陶磁器
SD-07	(180)	50	11	逆台形	N-43°-W	
SD-08	(496)	48	8	皿状	N-57°-E	
SD-09	(1,650)	60	25	逆台形	N-46°-E	陶磁器・瓦
SD-10	285	60	19	皿状	N-35°-W	陶磁器
SD-11	(335)	58	8	皿状	N-44°-W	陶磁器・瓦
SD-12	(886)	65	4	皿状	N-47°-E	陶磁器・土師器
SD-13	(770)	56	10	逆台形	N-50°-E	陶磁器・土師器
SD-14	(573)	60	11	逆台形	N-46°-E	
SD-15	(374)	40	7	皿状	N-42°-E	
SD-16	1,092	49	12	逆台形	N-47°-E	
SD-17	320	55	16	皿状	N-46°-E	陶磁器
SD-18	(1,660)	55	12	逆台形	N-47°-E	
SD-19	(458)	68	11	逆台形	N-44°-E	陶磁器・土師器・瓦・鉄製品
SD-20	211	60	16	逆台形	N-53°-E	
SD-21	(970)	60	15	逆台形	N-46°-E	陶磁器・土師器・瓦
SD-22	(880)	68	15	逆台形	N-49°-E	陶磁器
SD-23	(540)	69	15	逆台形	N-48°-E	
SD-24	232	57	17	逆台形	N-50°-E	
SD-25	(115)	35	6	皿状	N-18°-W	
SD-26	205	45	7	逆台形	N-49°-E	
SD-27	(400)	40	16	逆台形	N-27°-W	

( ) 値は遺有長・検出長

### III まとめ

今回の発掘調査は、史跡鳥取城跡附太閤ケ平天球丸石垣保存修理事業に伴うものである。調査は鳥取市教育委員会が実施し、調査面積は、平成2年度は約320m<sup>2</sup>、平成3年度が約530m<sup>2</sup>で計約850m<sup>2</sup>である。

発掘調査は、調査範囲が石垣後背地に限られるため断片的な調査となつた面があったが、貴重な遺構、遺物を検出することができ、天球丸における歴史の一端を知ることができた。

遺構面は2面検出され、建物跡、土坑、溝、ピット、瓦溜などの遺構が確認された。また、埋没していた石段や石垣が新たにみつかり、天球丸において曲輪の改変、拡張が行われていたことを裏づける資料となった。

建物跡には塀、掘建柱建物とみられる柱列跡があるが、構造などの詳細についてははっきりさせることはできなかった。土坑には瓦、石などを埋めた廐棄坑がみられる。溝は、その大半が排水に伴うものと推察される。

遺物には、陶磁器類を中心に土師器、瓦、金属製品、古銭などがある。陶磁器は大部分が細片であるが、唐津系や伊万里系の皿、碗、鉢や備前系の櫛鉢などが出土した。また、わずかではあるが中国製の陶磁器が含まれている。陶磁器には16世紀後半代から19世紀代のものがみられるが、量的には17世紀代と、18世紀代に比定されるものが主体をなしている。土師器は大半が皿であるが、瓦溜から塙甃が出土している。瓦は瓦溜や瓦溜土坑から大量に出土した。ほとんど丸瓦と平瓦で占められるが、軒丸瓦や軒平瓦もみられる。軒丸瓦には鶴羽蝶文と巴文が認められる。軒平瓦には文様の異なる12タイプのものがみられる。金属製品には鉄製の釘や鋸、真鍮製とみられる物、煙管がある。鉄製釘、鎧の中には焼痕の認められるものがある。古銭は6点出土した。寛永通寶、元豊通寶、景徳元寶などがある。

さて、今回の発掘調査結果をもとに天球丸の変遷をたどってみることにする。

今回の調査で、天球丸初段階の遺構と考えられるものとして、石段を伴う石垣（以下石段遺構と呼ぶ）と石垣02を検出した。本文中でも述べたように、この石段遺構と石垣02の間には基底部の標高が一致する点や、石垣02の主軸方向を延長すると石段の南側石垣の延長線とほぼ直交するなどの対応関係がみられる。これらのことから、初段階の曲輪がこれらの石垣によって形成されていたものと想定される。また、曲輪を復元してみると、現在の石垣から16m～18m背後に現在の石垣に対しておおむね相似形を呈する状態がみられ、この点からも石段遺構と石垣02によって曲輪が形成されていた可能性を強く感じる。曲輪の築造時期については遺物も少なく特定し難いが、石段の裏栗石の中から16世紀後半代に比定される陶磁器が出土しており、これらの遺物を積極的に評価すると16世紀後半代の築造の可能性も残る。

次に、石垣01が構築された時期が天球丸における第2段階の時期であろう。この石垣は、石段遺構から北西に延びる石垣に巻き足されており、その背後には大量の盛土が行われている。石段遺構が廃絶した後、あるいは廃絶と同じに構築され、曲輪の拡張が行われていることが明らかである。石垣01によって形成される曲輪の範囲については、今回の調査で明確にできなかったが、北西側についてみると、初段階の石段遺構から北西側に約5mの拡張が行われている。

ただ、石垣の構築状況をみると、比較的小型の石を多く使用している点や、前段階の石垣に比べると難な石積状況がみられることなどから推察して、大がかりな改変は行われなかつたのではないか。この石垣の構築時期は判然としないが、石垣の南西側埋土中には主に17世紀に比定される陶磁器類があり、これらの遺物が石垣廃絶期を示すものと思われる。

石垣01が廃絶後、小規模な改変が行われた可能性はあるが、おおむね現在みられる曲輪の状態に大きく拡張が行われたものと考えられる。拡張時期は特定できないが、延宝八年（1680年）の絵図（第19図）には、現在の曲輪に近い状態が描かれており、この時期までには曲輪の拡張が行われていたことがわかる。

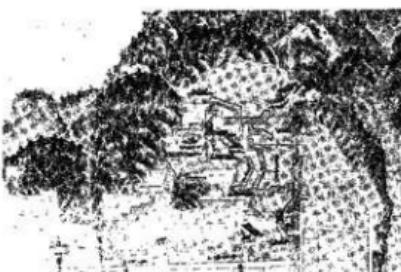
天球丸の改修は、17世紀代の比較的短期間に数回にわたって実施され、延宝八年までには現在にみる曲輪形態がほぼ完成していたことが窺われる。

次に、今回の調査で確認した遺構面との関係についてみることにする。

第I遺構面には現代の擾乱坑が及んでおり、かなり擾乱されているようである。遺構面上層には17世紀～19世紀の遺物が含まれるが、18世紀以降の陶磁器類が主である。この遺構面から検出した遺構の遺物はおおむね18世紀代のものが主体である。第I遺構面の時期は18世紀以降と思われる。

第II遺構面から検出した遺構は、初段階から現在の曲輪形態に拡張された第3段階までの、おおむね17世紀代を中心とする遺構であろう。各遺構がどの段階に伴うかは特定し難いが、SD27は初段階の遺構の可能性が考えられる。また、SK36～41、SK46～51、SD16～18、SD20～24や、E1区、2区から検出した建物跡等は、石垣02の天端より南西側（第3段階の拡張部）に位置することから、天球丸が大きく拡張された時期、即ち第3段階当初の遺構と推定される。

以上、調査結果をもとに天球丸の変遷についてその概略をみてきた。想定の城を出ない面があり、発掘調査結果と合わせて文献資料による検討が必要である。鳥取城の築城時期はもちろんのこと、その具体的な変遷等についてまだ不明な点があり、あわせて今後の課題としておきたい。



第19図 鳥取御城絵図（延宝八年）  
「鳥取県立博物館所蔵」

図版 1



天球丸石垣（西から）



D E F 区第Ⅰ邊縁面遭焼焼出状況（南東から）

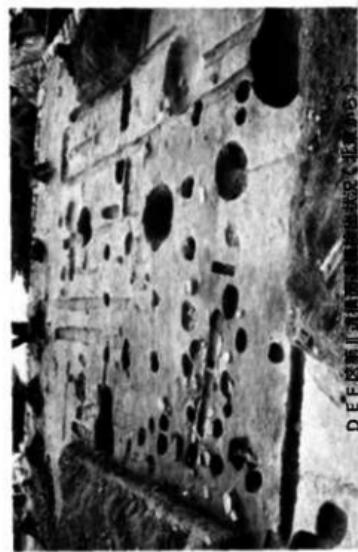


平成3年度調査区調査前全景（北東から）



A B C 区第Ⅱ邊縁面遭焼焼出状況（北東から）

图版 2



図版 3



石垣 01 梱出状況（北から）



石垣 02 梱出状況（南から）



石垣 01 取付状況（南西から）

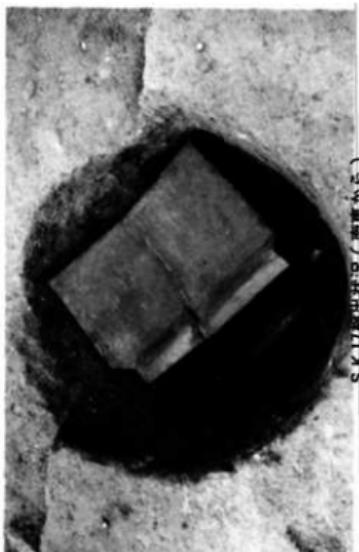


石垣 01 取付状況（北西から）

図版4



D E区柱列露出状況（北東から）



S-K17露出状況（南東から）



A B区  
柱列露出状況  
(南東から)



SK16露出状況（北東から）

図版 5



S K42 挿出状況（北西から）



瓦礫挿出状況（北西から）

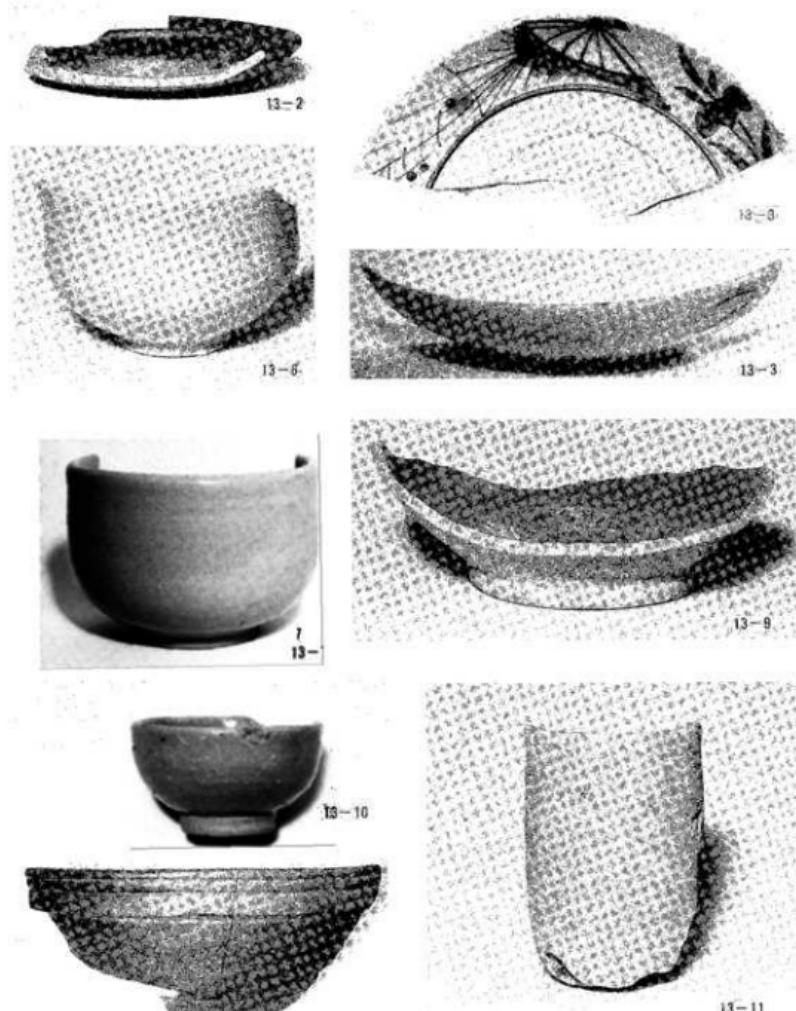


S K43 挿出状況（北西から）



S D27 挿出状況（北西から）

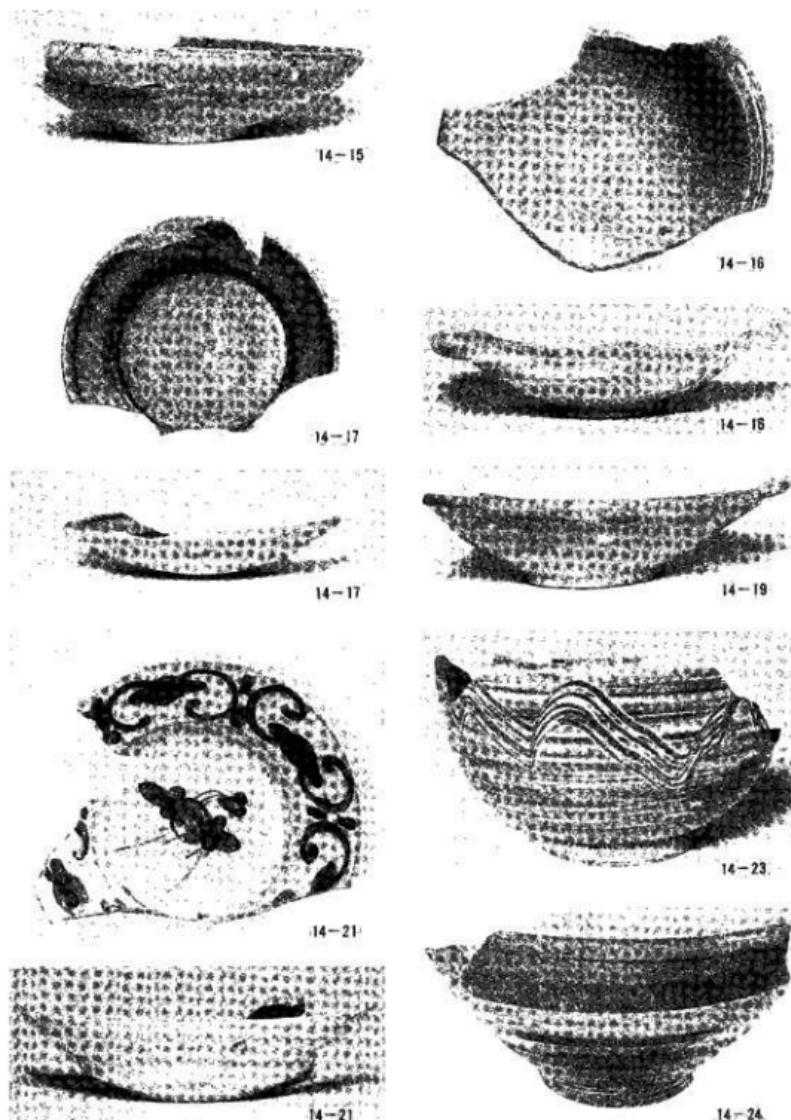
图版 6



13-2-3 SK 16 出上  
13-6-7 SK 10 出土  
13-10 SK 06 出土  
13-13 SK 04 出土  
13-9 SK 07 出土  
13-11 瓦 滴 出土

遇構出土遺物

图版 7

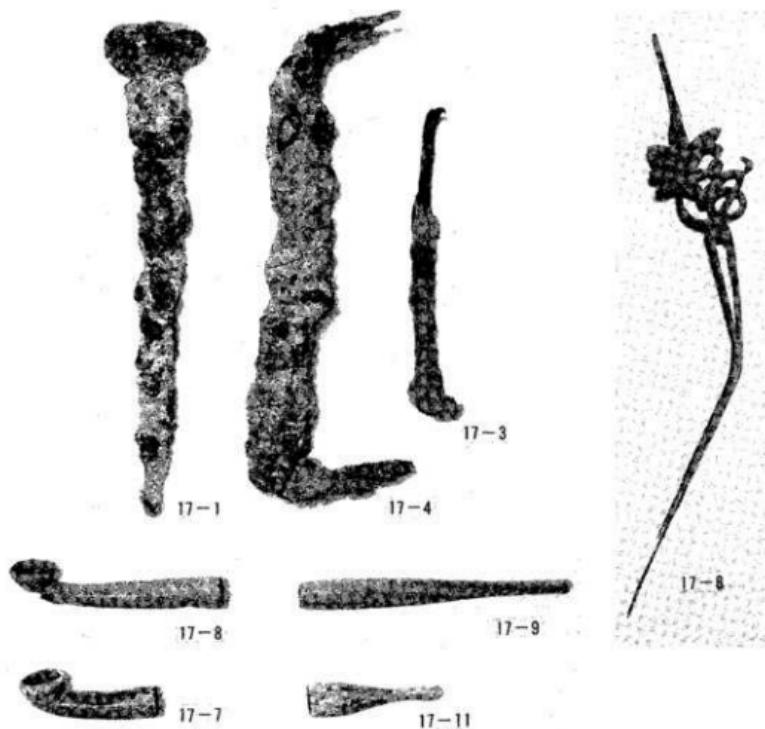


造構外出土遺物

図版 8



輸入陶磁器



金属製品

史跡鳥取城跡附太閤ヶ平  
天球丸発掘調査概要報告書

平成4年(1992)年3月 印刷・発行

編集・発行 鳥取市教育委員会  
印 刷 所 総合印刷出版株式会社